

(3) 難防除雑草の防除

オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ、ナガエツルノゲイトウは多年生雑草の中でも特に防除が困難で、一度水田に侵入し繁殖すると防除には多大な労力を要する。したがって、これらの雑草はまず水田に侵入させないことが重要である。また、多発した場合は除草剤のみによる防除は困難なので図1に示したような耕種的防除を組合せた総合的な防除を行い、何年か徹底防除を図る。

オモダカ

主な繁殖器官である塊茎は大型で休眠性がある。また、大きい塊茎では地表下 20cm の深さからも出芽する。そのため、水田におけるオモダカの発生期間は長く、千葉では代かき後 30 日前後に発生盛期となり、8 月上旬に発生終期となる。したがって、水稻生育期間中の防除法としては、オモダカに有効な成分を含む初期剤と初中期一発剤又は中期剤、若しくは初中期一発剤と中期剤の体系防除を行う。初期剤又は初中期一発剤はオモダカの発生初期(矢尻葉抽出前)までに早めに散布し、中期剤は矢尻葉 3 葉期までに散布する。オモダカに有効な成分としては、ベンゾフェナップ、ピラクロニル、テフリルトリオン、メタゾスルフロン、トリアフェモン、ハロスルフロンメチルなどがある。さらに、移植後 45~50 日頃に残草がある場合は、ベンタゾンを含む後期剤で防除する。

また、ほ場に残草など除草剤の効果を阻害する要因がなく、移植後 45~50 日頃に残草が多い場合は、ALS 阻害剤抵抗性個体(本章の [ALS 阻害剤に抵抗性を示す雑草の防除の項](#)を参照)による残草である可能性が考えられる。次年度以降はベンゾフェナップ、ピラクロニルやテフリルトリオンといったSU系以外の効果の高い成分が配合された初中期一発剤とベンタゾンを含む後期剤の体系防除を行う。稲刈り後は、早期の耕うんや非選択性除草剤の散布で、来年の発生元となる塊茎の形成を阻害する。

クログワイ

クログワイの発生活長はオモダカより長い。発生始期は5月上旬、発生盛期は代かき後 70 日~75 日であり、10 月の下旬まで発生が続く。一発処理で防除しきれない除草剤はないので、発生が始まる5月上旬中にピラクロニルやメタゾスルフロン、プロピリスルフロンなどの抑草効果のある成分を含む一発処理剤、草丈 30cm 以下まで有効なハロスルフロンメチルなどを含む中期剤を組み合わせる必要がある。また、更に後発が見られる場合は、草丈 15cm 以下まで有効なベンタゾンを含む後期剤の液剤を散布する。稲刈り後の塊茎形成量もオモダカと同様に多いので、塊茎形成初期までの耕うんによる形成阻害も効果が高い。

コウキヤガラ

主な繁殖器官は塊茎である。千葉県における水田での発生始期は3月中旬である。したがって、代かき時には草丈が 20cm 程度のものもある。一方、既発生株は土中に埋没すると枯死するので、代かきは浅水にし塊茎及び既発生株をよく埋没させると、初期除草剤の効果は向上する。防除はペントキサゾンやピラクロニルが含まれる初期剤又はメタゾスルフロンやプロピリスルフロンなどの抑草効果のある成分を含む一発処理剤で初期の発生を抑え、その後草丈 30cm 以下まで有効なハロスルフロンメチルなどを含む中期剤で防除するか、ベンタゾンを含む後期剤の液剤で防除する。他の多年生雑草と異なり塊茎形成は7月の始めからと早く、稲刈り時には地上部は枯死する。したがって秋季防除は不可能である。

多年生イネ科ほふく性雑草(ウキガヤ、アシカキ、キシユウスズメノヒエ、チクゴスズメノヒエ等)

水稻生育期間中の水稻用除草剤による防除では効果が期待できない。

春先、水田に侵入し始めた雑草は、節からの萌芽や発根の初期で生育が進んでいなければ、代かきをして土中へ完全に埋没することで発生を抑えられる。しかし、水田内で生育が進んで株化したものは、代かきで埋没しても再生力が大きく抑制効果は低い。代かき時にはほふく性雑草を残さないようにすることが大切である。キシユウスズメノヒエに対しては、代かき後の再生茎にクインチャーEWを散布すれば防除できる。但し、キシユウスズメノヒエ以外に効果はないので、正確な草種の判定が必要である。畦畔での繁茂量が多く、水田内にほふく茎を伸ばすようであれば、浸透移行性が高いラウンドアップマックスロードやバスタ液剤の散布を行う。秋季の発生量が多ければ、ラウンドアップマックスロードによる秋季防除を行う。

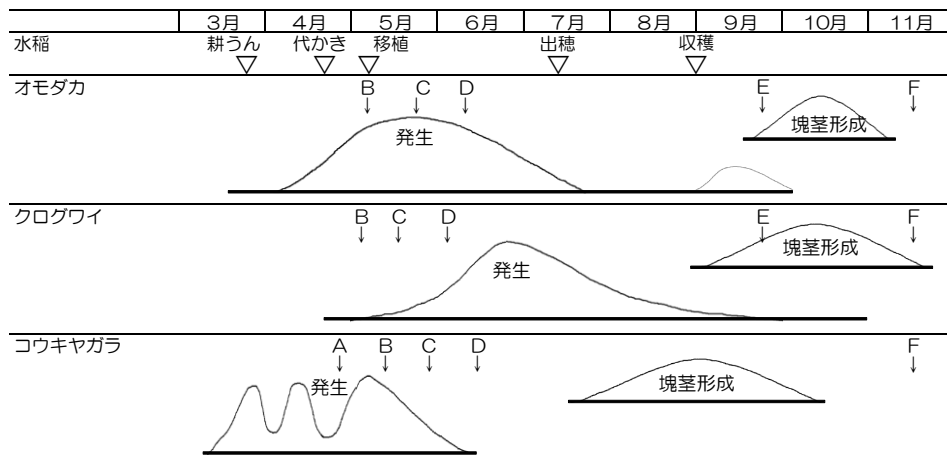


図 1 オモダカ、クログワイ、コウキヤガラの生活環と防除

- A 代かきによる既発生株の埋没、B 初期除草剤の散布、C 中期除草剤の散布、D 後期除草剤の散布
- E 稲刈り後早期の耕うん又は薬剤防除、F 秋~冬期耕うん(土壌が乾燥するほ場)